

アメリカ黒人とスポーツ

井上果苗

0章 はじめに

アメリカには非常に多くの人種が存在している。なかでもアフリカ系アメリカ人はアメリカ最大のマイノリティとされてきた。このアフリカ系と呼ばれる黒人にはアフリカ黒人の諸種族の血が多種多様に混交した純粋な黒人と、白人やインディアンその他の血が混交した混血の黒人が存在する。混血の黒人のほうがきわめて多い。国勢調査局が指示してきた黒人の分類上の基準は、混血の黒人も純粋な黒人と区別なく一様に「黒人」とみなされ、白人との混血は、黒人の血の割合がどんなに少なくても「黒人」として申告しなければならないというものだった。肌の色は、黒檀（こくたん）のような黒色から雪花石膏（せっかせっこう）のような白色まで濃淡さまざまで、金髪の黒人もいる。「一見、白人と間違えてしまうような黒人もいるが、黒人の血が一滴でも確認されれば、れっきとした『黒人』となる。」（本田 1991）。黒人は奴隷として働き、ひどい扱いを受けてきた。その歴史を簡単にではあるが述べていく。

アメリカはスポーツの盛んな国である。スポーツは人種統合された分野であるという印象がある。しかし、人種に意識して見ると普段何気なく見ている NBA には黒人選手が圧倒的に多いことに

気づいた。一方で、黒人選手をほとんど見かけないスポーツも存在する。なぜこのような偏りが生まれているのか、またスポーツの世界での黒人とはどのような存在なのか、考えていきたい。

本稿では黒人たちの歩んできた道、さらにスポーツにおける人種をアメリカ社会と関連づけながら考察していく。

1章 アメリカにおける黒人差別の歴史

1.1 背景

1.1.1 奴隷貿易の始まり

1619年、ヴァージニアジェームズタウンに20人のアフリカ黒人が売り渡された。これがアメリカ史上最初のアフリカ黒人の輸入と考えられる。

18世紀には黒人貿易は最盛期を迎え、多くの黒人が生まれ故郷から遠く離れた異国（ブラジル、カリブ海諸島、中央アメリカ、イギリス領アメリカ植民地）に運び込まれた。

1.1.2 奴隷制度成立

1670年、ヴァージニアでは白人年期奉公人が6千人、黒人奴隷が2千人であり、白人奉公人は黒人奴隷の3倍近くいた。18世紀に入ると、主要商品作物の生産が増大した。生産規模が拡大すればするほど、プランターにとって白人年期奉公人は労働力として不満足なものとなっていった。というのは、年期奉公人は購入費や年期中の諸経費、解放給付など、費用がかかる。それに比べて黒人奴隷は、最初の購入費こそ年期奉公人より高くつくものの、彼らは一生涯奴隷であり、維持費も安かった。そのため、黒人奴隷の数は増加していき、17世紀後半から18世紀初頭にかけて、アメリカ黒人奴

隷制度が次第に根を下ろしていった。

18世紀後半の独立革命の頃には、植民地に輸入される白人年期奉公人はほとんどいなくなった。

1. 1. 3 奴隷解放宣言

1861年、アメリカの国内紛争、南北戦争が起こる。奴隷制を否定する北部に対し、南部は奴隷制を肯定していた。この戦争は4年間続き、北部の勝利に終わった。その後、奴隷解放宣言が出され、南部の州で奴隷の扱いを受けていた黒人が解放されたように思われた。しかし、戦前から黒人奴隷を合法としていた南部諸州では依然として黒人に対する軽蔑が続き、19世紀末から20世紀初頭には南部諸州で人種分離政策（ジム・クロウ法）が合法的に進められた。

1. 2 公民権運動¹

1. 2. 1 バス・ボイコット運動

駅の待合室や便所、水飲み場や公園などの公共施設には、「白人専用」「黒人専用」と書かれた表示板があり、黒人は白人と同じものを使えないようになっていた。バスの座席も、後部は黒人用、前部は白人用と決められていた。

1955年の12月1日、アラバマ州の都市モントゴメリーで事件は起こった。黒人女性であるローザ・パークスは仕事帰りにバスを利用した。仕事で疲れきっていた彼女は、白人専用座席のすぐ後ろに座った。そこへ白人が乗車してきた。バスの運転手は、パークスに席を譲るように命令した。他の黒人はその要求に応じたが、パークスははっきり断った。そのため彼女は逮捕されてしまった。

この事件のニュースは、あっというまに黒人たちのあいだに広まっていった。すでにモントゴメリーには働く女性たちを中心とした人

種差別撤廃組織が存在していた。この組織にこの地の有力な牧師が参加し、この事件に対処すべき具体策をめぐって真剣な討議が重ねられた。その結果、バス乗車拒否運動を推進しようという結論にいたった。

当時、この地ではバスの利用者の3分の2が黒人であったため、この運動が成功すればバス会社に決定的な経済的打撃を与えることになる。しかし成功させるためには、黒人住民の全面的協力が必要となってくる。この運動を成功させるための中心的指導者に名前が挙げたのが、当時26歳のマーティン・ルーサー・キング牧師であった（キング牧師については後から詳しく述べる）。キング牧師はこの仕事を引き受け、見事に成功させた。運動の初日となる12月5日の朝、彼の家の前を通ったバスは空っぽだったのだ。黒人たちは約1年間にわたってこの運動を続け、とうとうバス会社は倒産寸前に追い込まれてしまった。

1956年11月13日、最高裁判所は「バスの人種隔離は違憲である」との判決を下し、この抵抗運動は黒人の全面勝利という形で幕を閉じた。

このバス・ボイコット運動をきっかけにして、公民権運動は急速に進んでいった。

1.2.2 ワシントン大行進

公民権運動が最盛期を迎えていた1963年の8月28日、首都ワシントンに25万人もの人が「1963年までに完全解放を！」との標語をもとに集まった。行進に参加した25万人のうち、白人が6万人もいた。1マイルほどの道のりを、黒人たちの切実な願いが書かれたプラカードを掲げながら行進した。この集会は混乱もなく進行し、最後にキング牧師の演説が行われた。このときに行われた演説こそ、

有名な「I have a dream. (私には夢がある)」の演説である。キング牧師の演説後、参加者たちは議会と政府に対し、10項目の要求を満場一致で採択し、この集会は幕を閉じた。

ワシントン大行進の翌年1964年、公民権法²が成立した。

1.3 キング牧師とマルコム X

1.3.1 キング牧師

1929年アトランタ生まれ。小学校時代に初めて人種差別を体験し、白人を恨むようになっていった。しかし、大学時代に白人と接する機会があり、白人と親しくなればなるほど白人に対する恨みや怒りは和らいでいった。白人も黒人も人間の考え方や感じ方はそれほどたいさなないということも知った。大学卒業後、クローザー神学校を経て、1954年に牧師となった。

1955年には、若干26歳でバス・ボイコット運動の指導者となったが、見事に運動を成功させ、バスでの人種統合を実現した。この運動での指導者としての地位を確立し、その後の公民権運動におけるカリスマ的指導者となった。彼は、非暴力でインドの独立を達成させたガンジーの影響もあり、徹底した「非暴力主義」を唱えていた。外出中に家に爆弾を投げ入れられるといった仕打ちを受けたにもかかわらず、「仕返しに暴力を使っても問題の解決にならない。白人の兄弟を愛さなければならない。私たちが白人を愛していることを、彼らに知らせなければならない。憎しみには愛を持って報いなければならない。」と訴えていた。

1963年のワシントン大行進では集会の最後に演説を行い、その演説は歴史的な名演説であると評価されている。

キング牧師を先頭に行われたこれらの運動の結果、公民権法が成立する。しかし、公民権法成立後、ブラック・パワーを唱える過激

派が出現し、キング牧師の思想は次第に時代遅れなものになっていった。それでも彼は非暴力方式が正しいと信じていたが、社会から徐々に孤立していく。

1. 3. 2 マルコム X

1925年生まれ。アメリカで最も著名で攻撃的な黒人開放指導者の一人。1948年獄中でイライジャ・ムハマドと彼の行っていたブラック・モスLEM運動に出会う。そしてマルコムはムハマドの教義と人柄に魅せられ入信の手続きをし、1952年にネイション・オブ・イスラム教団から「X」の性をもらい、そのときからマルコム X と名乗るようになった。ネイション・オブ・イスラム、ブラック・モスLEMの教義は白人とは一緒にならない、黒人は黒人だけの国または地域に住むことを理想とするというものであり、キング牧師の説いたものとはまったく正反対の主張であった。激しい口調で白いアメリカを批判し、公民権運動を罵倒していた。

マルコムはニューヨークで行われた集会で、「キリスト教は邪悪な白人が黒人支配に利用した宗教である。聖書は非白人を奴隷化するのに使われた、もっとも偉大なイデオロギー的な武器であった。」と、キリスト教がいかに黒人をだめにしてきたかを中心に語った。

マルコムのその白人観は、1964年イスラム教の聖地メッカ巡礼をきっかけに変化する。イスラム世界は肌の色について気にしていないということ、つまり肌の色による区別がないという認識にいたった。そして、人種を超越した真の兄弟愛が可能であるということを知ったのである。彼は正統イスラム教徒として帰国し、ネイション・オブ・イスラムを脱退した。

この頃には公民権運動では、キング牧師の非暴力運動に飽き足らず、学生非暴力調整委員会 (SNCC) の若者たちがマルコムの運動

に少しずつだが、関心を持つようになってきていた。彼らの招きで、マルコムは公民権運動の集会で講演をおこなっている。

1. 4 黒人の現状

1. 4. 1 国勢調査

国勢調査は10年ごとに行われ、基本的には個別訪問の面接で行われ、与えられた質問に答える形のもので、いずれも本人の申告に基づいている。人種³の選別は、「白人」「黒人もしくはアフリカン・アメリカン」「アメリカン・インディアンとアラスカ・ネイティブ」「アジア人」「ネイティブ・ハワイアンと他の太平洋島民」「その他の人種」とされている。2000年の調査から、自らの意思で二つあるいはそれ以上の項目を選べるようになった。また、人種とは別に民族⁴としてヒスパニック（ラテンアメリカ系）かそうでないかの選択が要求されている。

1990年に行われた国勢調査によると、アメリカの人口2億4,879万9,873人のうち、白人75.6%、黒人11.7%、ヒスパニック9.0%であった。その10年後、2000年の同調査によると、アメリカの人口2億8,142万1,906人のうち、白人69.1%、黒人12.1%、ヒスパニック12.5%であった。人口が増えていることを考えると、白人の減少や黒人の微増、また、近年ではヒスパニックの急増が見られる。今後も増加していくと見込まれている⁵。さらに注目すべきことは、これまで自ら黒人とみなしていた人々の20人に1人（180万人）の割合で黒人の項目と同時に他のひとつ以上の人種の項目に書き入れており、混血であることを明らかにしている。このような人種や民族が多様化するアメリカ社会のなかで、黒人の現状はどうなっているのか、考えていきたい。

1. 4. 2 教育

奴隷制度の存在する時代には、黒人は教育禁圧されていた。その後、1865年に奴隷制度が廃止されても「分離すれど平等」の教育方針をもっており、白人学校と黒人学校に分けられていた。1954年ブラウン判決⁶以降、白人と黒人の共学の時代が始まることとなる。しかし、共学になっても黒人生徒は約0.1%程度しかいなかった。それから10年たっても黒人生徒の比率は2%程度であった。1964年公民権法が成立し、保健・教育・福祉省や裁判所が地方教育への財政的助成などを通じて人種統合の促進を図り、その結果1973年には南部の学校における黒人生徒の比率は46%となった(本田 1991)。また、1994年秋現在、全米の公立学校生徒の比率は白人66%、黒人17%、ヒスパニック13%、その他5%であり、黒人生徒のうち、生徒の9割以上をマイノリティが占める学校に通っていた生徒は34%、生徒の過半数がマイノリティを占める学校に通っていた生徒は66%であった⁷。この数字を見る限り、公民権法により教育の場では法律上での人種統合はされているが、通う学校に偏りが見られる。

1970年から80年代を通じて黒人の大学への進出は着実に伸びていった。しかし1980年代には様相が変わり、逆流現象も起こっている。黒人の大学在籍率は80年の9.2%から、90年代の8.9%に低下している。少なくとも大卒の学歴を持たないとなかなか正規の職業に就きにくい。しかし貧困層は経済的に子どもを大学に送るだけの余裕がないのである⁸。

1. 4. 3 雇用

1970年代以降、アメリカ黒人の状態は多方面で改善され、彼らの地位も急速に向上した。たとえば政界進出である。黒人公職者は

1965年の280人から、1990年には7,000人以上になっている。公職者の中でも、黒人市長の急増がみられる。1965年でたった3人だったが、1990年には318人となった。さらに、1990年に行われた首都ワシントンの市長選挙では、シャロン・プラット・ディクソンという黒人女性が当選し、合衆国の首都に「アメリカの大都市で選ばれた最初の女性黒人市長」が誕生したこととなる。このような政界進出を果たした人々のような富裕層の黒人が増加すると同時に、その一方では貧しい最下層の黒人も増大しており、黒人たちの間に分極化の傾向が見られるようになっていった。では、最下層の黒人たちはどのような仕事に就いているのかを述べていく。例として、鶏肉加工工場で働く労働者を挙げる。工場では鶏の臓器の猛烈な臭いの中で働かなければならない。そういった工場の労働者の3分の2は黒人女性である。仕事も単調でトイレにも行けず、もし行ったら罰せられることもあるという。しかもその賃金は製造業の中で最も低い部類に属する。また、こうした労働者の多くはトレーラーハウスに住んでいるという状況である。また、アメリカには最低賃金制が導入されているのだが、ヒスパニックやアジア系の外国人労働者はその適用を受けない。そのため、黒人に変えてそれらの外国人を雇用し始めた。

1. 4. 4 経済状況⁹

黒人の失業率は、特に1983年は、白人の失業率8.4%に対し黒人は19.5%と、2.3倍の数値を表しており、常に白人の2倍、またはそれ以上であった。黒人の失業率は白人の失業率をはるかに上回っている。貧困率も同様のことがいえるのである。2004年のアメリカにおける貧困率¹⁰は12.7%であり、人種別に見ると黒人の貧困率が24.7%であるのに対し、白人は8.2%である。

次に所得を見てみる。アメリカ全体の中央値（最も数の多い所得）は2004年には、4万4,389ドルであった。人種別に見ると黒人家計の中央値の所得は最低で、3万134ドルであった。1996年10万ドル以上の所得のある層は8.2%であったことからいえるように、もちろん黒人にも超富裕層も数は少ないが存在している。このように、富が一部の富裕層に集中しており、黒人の中でも格差が生じている。

2章 スポーツと黒人の関係

2.1 野球界での黒人差別

2.1.1 ニグロリーグ

1880年代中頃、米国プロ野球において黒人選手がチームから締め出された。これは白人と平等な生活を黒人には与えないという当時の風潮を反映している。そこで、黒人たちは黒人だけでチーム、さらにリーグを作るという方法で対抗した。これが「黒人リーグ（ニグロリーグ）」の誕生である。

2.1.2 黒人初のメジャーリーガー ジャッキー・ロビンソン

1947年メジャーリーガーとなる。彼がメジャーリーグに登場したとき、心配されたような暴力事件や騒動は起こらなかった。しかし、やはり白人選手やファンからの屈辱的・差別的な言動や行為は見られた。そういうときでも彼は感情的にはならなかった。その態度とグラウンドでの実績で、初めは冷たい目をしていたチームメイトも受け入れるようになった。だが、ジャッキーは「彼らも私を好きになったわけではなかった。私が財布を膨らませるのに役立つということを知ったので態度を変えただけ。」と冷静に言っている。

彼が出場する試合には、黒人のファンが殺到する。白人と黒人の観客席を別々にしていた球場では黒人ファンを収容しきれなくなり、収益への損失につながるという判断から、そのような分離座席制度を廃止する球場も現れ始めた。ジャッキーがひとつの制度を変えたといえる。

ジャッキーの入団後、徐々に他の黒人選手も各球団に入り始めた。しかし、16球団すべてに黒人選手が誕生するまでには彼がメジャーデビューを果たした1947年からさらに10数年の年月を要している。また、フィールド内に4人以上の黒人選手を出場させないという暗黙の協定が1954年まであったといわれている。

2. 1. 3 守備位置における差別（スタッキング）¹¹

1960年代に入り、プロ野球界における黒人選手の割合はますます増加したものの、別の形で黒人差別が表れてくる。それがスタッキングである。野球において中心的なポジションといわれる投手、捕手、遊撃手、二塁手には白人が多く、非中心的ポジションとされる一塁手や外野手には黒人が多いというのである。1980年時点で、中心的ポジションの白人選手44%黒人選手15%、一塁手・三塁手の白人選手31%黒人選手18%、外野手の白人選手25%黒人選手54%となっている（漆原・近藤・友添 1992）。

このような差別が行われる理由として、白人選手と首脳陣にはチームにおける黒人と白人の社会的距離を支持しようとする意向があること、また、首脳陣は重要な協同や意思決定を必要とする守備位置の責務能力に黒人選手が白人選手に劣ると考えているという二つの要因の連鎖によると1982年にJ. J. コークリーは説明している。

一方で、「中心的ポジションへの配置は選手への負担増を否めず、打撃面でのマイナスの要因となりうるので、この状況が戦略上の采

配であるのか、あるいは差別意識の顕現であるのか判断は難しい」(漆原・近藤・友添 1992) という意見もある。

2.2 スポーツ界における黒人の現状

2.2.1 アメリカ三大スポーツの黒人選手の割合¹²

研究者により、人種の分類が異なるため比較するのはなかなか困難である。

メジャーリーグ (MLB) の黒人選手の割合は 1970 年の 25% から 79 年に 73% まで急増したが、その後減少し、96 年は 17% である¹³。プロバスケットボール (NBA) の黒人選手の割合は 1971 年の 54% から 79 年には 75%、96 年には 80% と増加し続けている。アメリカンフットボール (NFL) の黒人選手の割合は 1971 年の 32% から 78 年には 48%、96 年には 67% と、NBA 同様増加し続けている。

2.2.2 なぜ多くの黒人がアスリートを志すのか

根底に「精神対肉体、知力対体力」という二元論が潜む西洋文化において、肉体的営為であるスポーツでアフリカ系アメリカ人が秀でることによって人々は、黒人の肉体的優越を承認する代償として黒人の知的・精神的劣等をも信じるようになり、人種的ステレオタイプが強化されることになる。このステレオタイプは、人種を問わずアメリカ人に広く浸透している。その結果、黒人の児童は、アスレティズム (運動能力・身体能力) を自分たちの天職であるかのようにみなし、アスリートになることを熱望するようになり、その多くが勉強に費やすべき時間や労力をスポーツに投入するようになる。このような志向と価値観のあり方は、「スポーツ・フィグゼーション (スポーツへの固執・執着)」と呼ぶべきものである。

アフリカ系アメリカ人はスポーツに固執するあまり、20世紀のほとんどの間、自分たちの知的な能力に関心を向けてこなかった。出世するには運動選手になるしかないという思い込みがあり、知的野心を拒絶してしまっていた。また、学校のカリキュラムに従い、喜んで標準的な英語を話したり、図書館で多くの時間を過ごしたり、勉強したり時間を厳守したりすると、「白人ぶっている」とみなされた。学業で頑張ろうとする黒人生徒は乱暴な黒人たちに疎外され、仲間はずれにされ、暴力さえ振るわれることもあった。このような状況で学業に励むのはなかなか難しい。

教育上の苦境に陥って士気阻喪したがゆえ、黒人たちは1920年代や30年代になって、次第にアスリートを賞賛するようになったのだ(カーター・ウッドソン)¹⁴。今日のアメリカの大学にはアスリートとしての技能を磨くだけで、あとは何もしないアスリートも多くいる。教育の成果が思うようにならなかったことも、黒人がアスレティシズムによって自尊心を育てるようになった一因である。運動能力による業績全般に普通以上の地位が与えられるようになり、学問や専門教育を受けたことがない者でも、立派な人物と認められた。

黒人の身体的優越に関するステレオタイプもまた、スポーツへの執着を促している。この身体的優越については次に詳しく述べることとする。

2. 2. 3 黒人がスポーツで成功する理由、優れた身体能力¹⁵

川島浩平は、黒人の優れた運動能力の要因として身体的要因、社会的要因という二つの説があるとしている。

① 身体的要因(遺伝説)：人種間には遺伝的に規定された運動能力

の優劣が存在するというもの。遺伝的なアドバンテージゆえ、黒人は瞬発力や鋭い反射を必要とする種目で圧倒的に有利である。それゆえ、国際大会でのメダル独占やベスト記録の保持が可能であり、非黒人はいくら努力しても遠く及ばないといったような主張がなされている。それはまた、しばしば人種間の知能差論争と連結して、極端な人種像の形成に力を貸してきた。黒人は生まれつきのアスリートだが、知能的に劣っているとされた。

- ② 社会的要因（環境説）：運動能力の発達は、知能同様、社会・文化的環境の力によって促されるというもの。長年の人種差別が他分野での成功機会を著しく制限してきた結果に過ぎない。差別が撤廃されれば、黒人の才能は多方面に分散され、スポーツでの傑出も目立たなくなる。

環境説がより広範な支持を得、一般市民の間で優位に立つならば、人間の養育や教育の大切さを認知し、人間の可変性と多様性に肝要な思想が普及する社会が成熟するだろう。反対に、遺伝説が優位に立つならば、生物学や生理学が発言力を強め、人種差別を助長するような理論は思想がもてはやされるかもしれない。

一流黒人アスリートには遺伝子レベルでの優位があるという、説得力のある研究がある。彼の研究は、アフリカ系の人々と他の人々との間には少なくとも一部、遺伝子配列の異なる部分があり、これが一部のスポーツでは優位につながる可能性があることを示している。しかしこうした進化に由来する小さな差異があったとしても、環境と文化によって強化されることもあれば、弱められることもある。こうした生まれつきの差異は、誰が、どんなスポーツで、どれだけ活躍するかに影響する。つまり、身体的要因、社会的要因どち

らか一方で説明することは困難であり、両方の要因が合わさって初めて黒人アスリートの強さが説明できるだろう。

2. 2. 4 黒人アスリートは本当に強いのか——ビル・ジェームズの研究

黒人アスリートは本当に強いのかについて、野球史家ビル・ジェームズが研究を行った。まず、54名の白人ルーキーに対して、同じような統計を有する同数の黒人ルーキーを比較してみた。黒人プレーヤーはメジャーリーグに昇格したのは54名中44名と多く、出場試合数で48%、ヒット数で66%、三塁打本数で93%、ホームラン数で66%、打点で69%、盗塁で400%、白人プレーヤーを上回っていたという結果が出た。盗塁数の多さは目を見張るものがある。以前から言われてきた、黒人は白人より瞬発力に優れているという説に当てはまる。

他にも、プロ一年目の成績や、プレースタイルも似通っている黒人選手レジー・ジャクソンと、白人選手ボブ・アリソンとを比較した。ジャクソンはプロ入り後、成績を向上させていったのに対し、アリソンは何シーズンか後にどんどん低迷していった。この研究結果をより確かなものにするため、ジェームズは49名の黒人・白人プレーヤーの比較調査も行った。やはりそこでも、黒人プレーヤーのほうが選手生命が長く、スピードに衰えを見せず、打撃にも一貫して優れていた。

研究対象をスピードのないプレーヤーに絞ったり、同じ時代のプレーヤーを比較するようになりなどして研究を続けたが、それでもやはり人種の線に従って結果がわかれた。

彼は「黒人が優秀なアスリートになるのは彼らがそうなるべくして生まれたからだ。すなわち遺伝的なものだ。あるいは、生まれた

ときには同等でも、彼らは優れたアスリートに成長するのだ」と結論づけている。

2.2.5 スポーツ界で差別は存在するか

これまでも述べてきた黒人アスリート数や活躍ぶりを見ると、スポーツ界には完全に人種統合され、差別はなくなったようだが、管理職となると話は別のようである。NBAは長年スポーツ界でもっとも興味深い人種交流の舞台を提供してきた。この組織は白人による経営、黒人アスリートの優越、そして人種を超えた魅力などが合体したものである。しかしそんなNBAにおいても、白人による管理職の独占が他の主要スポーツと遜色なくらい徹底されている。球団社長や最高責任者はMLBとNFLはゼロ、NBAでも7%に過ぎないのである¹⁶。NBAの人種に関する公式な立場は「人種に左右されない（カラーブラインド）」であるが、実際には見てみぬふりをしているにすぎない。

1990年代初頭に、NBAチームはモバイルコンピュータを導入した。93年にはすべてのチームがバスケットボール向けの特製ソフトを装備した。1930年代にはアメリカの半分が「黒人は機械を用いる仕事に慣れていない」と考えていた。黒人の技術的な素質への信頼が欠如していたのである。この信頼の欠如ゆえ、黒人は大学やプロのスポーツにおけるヘッドコーチの地位から締め出されてきた。また、白人至上主義者は、黒人の指導力を認めようとしなかった。このような人種主義は、公式上は人種統合したNBAという世界でもなお存在し、ほとんどの指導的地位を白人に与える決定を促してきた。もっとも人種統合が進んだといわれるスポーツ界でさえもいまだに植民地的秩序が見られるのである。

2.1.3で述べたスタッキングは、NFLのクォーターバック¹⁷にお

いて黒人選手が少ないという人種主義の名残が若干あるものの、現在ではほとんど消滅した。

2.3 スポーツにおける人種統合とアメリカ社会

スポーツ界での人種統合が実現し、黒人アスリートが活躍するようになることは黒人コミュニティに少なからず影響する。彼らの活躍に刺激を受け、感化されやすい黒人少年たちはアスリートになるのが唯一の成功の道であると信じ込んでしまう。黒人アスリートたちの成功は、皮肉にも知的な業績が軽視されることにつながる恐れ、そして黒人のスポーツへの固執を強化してしまう可能性があるのだ。

「人種統合の行われた現在の人気スポーツの状況は、黒人大衆の進歩のためにプラスの力になるどころか、おそらくはマイナスの影響力を持つ。スポーツが及ぼしているのは、黒人大衆への居所麻酔薬的な作用であり、人生の苦闘への精神的な励ましという幻想を黒人ファンに与えている。」(ハリー・エドワーズ 1970年代)。この言葉は、スポーツ以外での分野で黒人のチャンスが今よりもはるかに制限されていた 1970年代のものではあるが、今日でもフィールドは黒人に占められている一方で、ビジネスエリートには黒人が少ないというアンバランスな状態のままである。

このエドワーズの考えは少し大げさのようであるが、黒人がスポーツへ固執してしまう恐れを指摘している。他に夢を見出すことができない黒人がスポーツに固執し、黒人アスリートが増え、それに刺激された黒人少年たちがアスリートを目指すようになるという図式を短絡だとして否定することはできない。

2.4 メジャーリーグのいま

近年、メジャーリーグにおけるアフリカ系アメリカ人選手の減少

が見られる¹⁸。1996年に17%だったのが、2004年には10%程度、現在（2007年開幕時）は約8%となり、10年でほぼ半減してしまった。黒人選手が8%程度という割にはメジャーリーグで多く見かける気もするが、この数値はアフリカ系を指しているのであり、実際は近年増加している中南米系選手¹⁹も多く存在するため、そのような印象を受けるのだろう。有名選手を例に挙げると、バリー・ボンズはアフリカ系であるが、サミー・ソーサは中南米系である。つまり、メジャーリーグの分類によると、ソーサは黒人選手とならないのである。しかしながら、アフリカ系が減少しているのは事実である。この理由として考えられるのは、黒人の子どもたちが野球離れをしていることである。かつてニューヨーク・ヤンキースで活躍したデーブ・ウィンフィールドは「黒人社会で野球は急速に関心を失っており、黒人選手はいなくなるだろう」と警告している。黒人の野球離れのほかには、黒人の貧困と関係している可能性も考えられる。アイスホッケーなどはお金のかかるスポーツであるため、黒人選手はほとんどいないということは以前から注目されていた。野球はあまり費用がかからないとされていたが、ボールさえあれば楽しめるバスケットボールに比べると、やはり用具が必要でお金がかかる。1.4.3でも述べたように、アメリカ社会での貧困ははなはだしい状況である。黒人選手の減少により、黒人少年の野球への憧れが失われるといった悪循環を生んでしまっている。

3章 おわりに

これまで、アメリカ黒人差別の歴史、また、スポーツにおける黒人をアメリカ社会と関連づけながら考察した。黒人差別の歴史は残酷なものであるが、過去の歴史として解決されたわけではない。黒

人と白人の雇用や経済状況を詳しく比較していくと、いまだに黒人が貧困で苦しんでいることがわかる。黒人のなかでもライス国務長官（アフリカ系アメリカ人）のように社会的地位を獲得し、富裕層と呼ばれるような人もいる。しかし、それはごく一部の人であり、貧困層の人々は今でもつらい生活をしいられている。黒人の間にも格差が生じ、大多数は貧困から抜け出していないのである。

また、スポーツの世界では、NBA といったほとんど黒人選手が占めるスポーツでも、管理職はほとんど白人であるという状況である。MLB では、黒人（アフリカ系アメリカ人）の選手が減っている理由のひとつとして貧困が原因と考えられる。アメリカ三大スポーツの中では野球が最もお金がかかるため、バスケットボールやアメリカンフットボールのほうに黒人が流れていってしまっている。また、ジャンプ力や瞬発力に優れているとされる黒人にはバスケットボールやアメリカンフットボールのようなスポーツが合っているから、ということも考えられる。

法的には黒人差別は解消されている。しかし、経済的には黒人は現在も最下層に位置しており、不均衡は解消されていない。また、お金のかからないスポーツに黒人アスリートが多く、さらに管理職はほとんど白人が占めているといった現状であり、厳然たる事実として人種における不均衡は存在している。

黒人は白人よりも知的に劣っており、身体的優越があるといったステレオタイプは現に存在している。実際に考察してみると、確かに黒人は身体的に優越しており、そういった黒人と白人の違いがあるのは事実である。その違いをステレオタイプ化し、黒人に対する偏見を持つのは差別意識といえる。一見、人種統合のされているように見えるスポーツでも、差別意識は残っているのである。

多くの人種が共存する国であり、スポーツの盛んな国でもあるア

アメリカにとって人種差別とスポーツというテーマは逃れられないテーマであり、向かい合っていかなければならないテーマである。この論文で述べた内容はほんの一部に過ぎない。まだまだ研究の余地はある。それほどアメリカの人種差別にまつわる歴史は深いのである。

注

- 1 公民権運動とはアメリカ黒人が、人種差別に抗議し、憲法の保障する諸権利の保護を求めて展開した運動である。
- 2 有色人種に公民としての権利を与えた法律。これにより、法の上における人種差別が終わりを告げることとなった。
- 3 人間の生物学的な特徴による区分単位。
- 4 文化の伝統を共有することによって歴史的に形成され、同属意識を持つ人々の集団。
- 5 <http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/files/newsltrs/38/no38kitazume.html> より引用。
- 6 「分離すれど平等」という教育方針は黒人にとって差別教育であり違憲とし、学校における人種統合を命じた判決
- 7 http://www.clair.or.jp/j/forum/c_report/html/cr141/index.html より引用。
- 8 <http://jp.encarta.msn.com/> より引用。
- 9 これらの数値は <http://www.redcruise.com/nakaoka/> によるものである。
- 10 最初に導入されたのは1964年。貧困の定義はいろいろ問題も含んでいるが、ひとつの規定として「生活の必需品を買えない層」が貧困層に分類されている。
- 11 体育原理専門分科会編（1992）『スポーツの倫理』不味堂出版 p. 144-147
- 12 これらの数値は体育原理専門分科会、前掲書、<http://yarukotoyaraneba.blog120.fc2.com/> によるものである。
- 13 なぜこれほどまでに急増したのか不思議だが、この数値は黒人のなかに中南米系（ヒスパニック）等を含んでいる可能性がある。中日

新聞（2007.6.27）の発表では当時のアフリカ系選手は20%程度だったとされている。

- 14 ジョン・ホバマン（川島浩平訳）（2007）『アメリカのスポーツと人種——黒人身体能力の神話と現実』p. 71
- 15 <http://webg.musashi.ac.jp/~kokoharu/text.htm> より引用。
- 16 <http://webg.musashi.ac.jp/~kokoharu/jugyooutline1998/18.htm> より引用。
- 17 アメリカンフットボールで、攻撃側のポジションのひとつ。プレーの展開を図る、攻撃の中心。
- 18 メジャーリーグでは通常、白人、黒人、中南米、その他と分類される。実際、中南米に分類される人々の多くの祖先はアフリカから連れてこられている。したがって、もとを正せば人種的にはいわゆる黒人である。
- 19 人種的には白人、黒人、インディオ、そしてそれらがさまざまな割合で混じりあった人たちからなる。数でアフリカ系選手を上回っている。

参考文献

本田創造（1991）『アメリカ黒人の歴史』岩波新書

上坂昇（1994）『キング牧師とマルコム X』講談社

体育原理専門分科会編（1992）『スポーツの倫理』不昧堂出版

ジョン・エンタイン（星野裕一訳）（2003）『黒人アスリートはなぜ強いのか？』創元社

ジョン・ホバマン（川島浩平訳）（2007）『アメリカのスポーツと人種——黒人身体能力の神話と現実』明石書店

中日新聞（2007.6.27）、（2007.7.17）

<http://www.webleague.net/mlbnews/04mlbnews08.html>

<http://yarukotoyaraneba.blog120.fc2.com/blog-category-1.html#entry32>

<http://www.redcruise.com/nakaoka/>

<http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/files/newsltrs/38/no38kitazume.html>

<http://webg.musashi.ac.jp/~kokoharu/text.htm>

<http://webg.musashi.ac.jp/~kokoharu/jugyooutline1998/18.htm>

<http://jp.encarta.msn.com/>